

# 二天一流



(下段の構え)

二天一流は御存知のように宮本武蔵の創始した流派ですが、後代になっていくつかの系統に分かれ、現在も日本各地に伝承され、かなりの人が学ばれています。

宮本武蔵といえば実戦の雄として多くの逸話を残した人ですが、書画や彫刻にも優れ、晩年には独自の境地に達する等等、その生涯は今日に到るまで、多くの武道志向者に優れた示唆を与え続けてきました。フルコンタクト空手の始祖である故大山倍達総裁も武蔵に傾倒したことで知られていますが、武蔵の主著ともいえる五輪書は今日に到るまでに多くの人に読まれ、海外でも翻訳されています。さしずめ日本武道史上のスーパースターと言えましょう。

さて、その二天一流ですが、その内容は門外漢には意外に誤解されていることもまた多いのです。その最たるものは「刀を片手で扱えるはずがない。武蔵は馬鹿力があつたから、二刀を両手に持って使えたんだろう」という意見です。これはかなり高名な文士や学者等でも意外に多いのですが、腕力に任せて刀を振り回す、剣道の斬り返しのような感覚しか持ち合わせていないと、このような素朴な誤解を生じるのです。

先ず、日本刀とは腕力で振り回すものではなく、刀の重みを利用して斬るのであり、流派によっては、これを口伝で「朽木倒しに斬れ」と教えています。つまり老木が朽ち果てて、木の重みで倒れるように、刀の重みを巧みに使うのです。従って、古流では剣の素振りほとんど全てが全身運動であり、上半身の無駄な力みを戒めています。また古流では前述しましたように実戦では最短距離を最小の動きで間合いに入って斬ることを以て本分とするのです。ついでに言えば、人間は何も真っ二つに斬らなくても、頸部や手首の動脈を斬れば十分に致命傷になります。従って刀を片手で扱うことはもちろん可能で、そ

のためには体で斬ることを体得していることが前提になります。

そこで話を二天一流に戻しますが、この流派では肩を支点とした円運動によって二刀を扱うことによって、刀の重みを利用して斬るという方法をとっています。これを「切っ先返し」といい、五輪書でも書かれています。特に二刀を使う型は、全てこの方法で剣を使っています。二天一流の木刀は、あたかも板のように薄く削った軽いものを使っていますが、これは切っ先返しの際に刃筋を制御する感覚を体得させること、そして前述したように、無駄な力を抜くことが眼目になっています。

それでは、片手で持った刀で相手の打ち込みを受けられるのか？という疑問もあろうかと思えます。結論から言えばこれも可能です。というのも、打ち込みを受けるといって、相手の太刀と直角にがっちり受け止める、というイメージがあるかもしれませんが、二天一流では基本的にこのような受け方はしません。太刀の峯を抑えて封じるか、或いは打ち込んだ太刀を摩擦によって下に摺り落としてしまうのです（これを「張る」といいます）。ついでに言えば、大小を交差させて受ける十字留めも打ち込みをがっちり受け止めるというよりは、受け止めた瞬間に太刀を下または横に外してしまうのです。このときは右手の太刀がセンサーのような働きをします。